

いが、人が集まってきて日本のことを聞かれる。電気があるか、飛行機があるか、バリカンがあるか等々である。おもしろい話、涙物語をすると、同情してパンの残りやチーズをくれる。帰りは町はもう寝静まっている。崖を登り、また月夜の影をねらう。手品師と同じ死角をねらうのである。

こうした生と死の際どい瀬戸際を歩いてきて、さまざまな思い出が錯綜する。薄れゆく追憶である。

私のソ連抑留体験

新潟県 宮野 泰

一、敗戦

昭和二十年五月二十日、徴兵年齢繰り上げで満州国立建國大学の学生であった私は、新京神社の境内での壮行式のあと、大勢の仲間たちとともに、臨時列車で北へ向けて出発した。十九歳の誕生日二か月前である。二十二日牡丹江市の近くの樺林街にあった満州第一二

一部隊（満州第一二〇六四部隊）飯田隊牧川隊へ編入、重機関銃中隊であった。この日があのソ連抑留という異常な体験につながるのだが、神ならぬ身知るよしもない。七月上旬現役の者だけが寧安街に新設された一二二師団挺身大隊（忠華部隊剛健隊第二小隊）に転属となる。毎日対戦車肉薄攻撃の訓練だけである。

ソ連軍侵攻と同時に東京城を経て鏡泊湖の陣地（といっても何もない山中）へ転進、ソ連軍の戦車を待つ。開戦直後降り続いた雨もやんで、真っ青に澄んだ碧空、静かな緑一色の山中に一人タコつぼの中で死を待つ。いろいろな感慨が後から後から頭をよぎるが意外と冷静であった。一種の諦観の境地であったのだろうか。ところが翌十六日夕刻、非常呼集で整列した兵たちは、部隊長から敗戦を告げられ慟哭した。

無念の涙はとめどなく流れる。ところが、その夜の兵士たちの行動の異常さは、またまことに驚くべきものであった。酒に酔い放歌高吟、喧騒の極みの状態となった。考えてみれば、長い間の抑圧と、死から解放されて一人の人間としての喜びの表現にほかならな

ったのだ。十八日の夕方、巨大な戦車を先頭に進撃してきたソ連軍を見て、我々は我々の肉薄攻撃がいかに無力なものであるかを知らされた。

二、抑留

師団命令は帰国は明春になるから越冬準備をせよ、とのことである。食糧の節約、住居の準備等々の作業が連日続き、兵士たちは毎日汗を流していたが、九月に入ると突然下山命令が出た。南湖屯で正式な武装解除を受けた。行軍を続けて蘭崗の飛行場の格納庫での生活をしているとき、身体検査があった。身体検査といってもソ連女軍医が尻の肉をつまむだけで、弱兵と認定され本隊から分離、寄せ集めの隊へ入れられる。本隊は厚い防寒外套をもらって一足先に日本へ帰るのだと聞かされ喜び勇んで出て行つた。あにはからんや、シベリアへの旅立ちであつたのだ。

三、掖河收容所

寄せ集めの弱兵集団は十一月初旬、ようやく牡丹江近くの旧軍の兵舎に落ち着くことになった。

聞けば掖河の四一四部隊の跡であるという。

毎日の作業は自活のためのものだけで、ときには貨物駅の労働があつた。食事は一日二回、それも量は極めて少なく、トウモロコシの粉が赤いコウリヤンである。私たちは毎日下ばかり見てうろついていた。れんがのかけらもバンに見えた。軍隊の組織はとつくなくなり、気の合つた者が四、五人でグループをつくつて、助け合つて暮らした。まき取りや野菜運びのときに手に入つた食糧を分け合つてベチカで炊いて食べた。ところが暮れから正月ころにかけて突然に、どこからともなく大勢のふらふらになった兵士たちが送られてきた。話を聞いて驚いた。日本へ帰るつもりで行軍を続けたのだが、シベリアに送られた。そこで待つていたのは毎日の重労働であつた。食糧も不足で病人続出、使いものにならなくなった者がまた満州に送り返されたのだ。ほとんどが栄養失調で顔はむくんで下痢に悩まされていた。この時点から收容所は地獄となつた。私たちは毎日の作業がこの人々の世話をすることに変わり、汚物の処理、清掃、洗濯、食事の世話、まき集めは主として旧軍の施設や官舎からであつたが、

距離は遠くなり、水汲みは水面が結氷して危険極まりない。それと毎日朝になると何人か死者が出る。遺体運びも我々の仕事であった。遺体はすぐコチコチに凍ってしまう。トラックに一台分くらいになるとソ連軍がどこかへ運んで行く。この方々はどのようにして葬られたのであろうか。まことに今思い出しても断腸の思いである。敗戦後初めてのつらい長い冬が終わろうとする三月初旬、遠雷のような砲声がしばらく聞こえたと思ったら、柵の外に中共軍の兵士がチラホラ見えるようになる。四月に入るとまた身体検査があり、弱兵は中共軍へ引き渡され、我々は今度は貨車に乗せられた。

三、タムガ収容所

掖河から貨車に乗せられ、長い不自由な旅の末、五月上旬、着いたところはソ連邦ガザフ共和国の首都、シルクロードの町タシケントであった。バイカル湖はまだ厚い氷に閉ざされていたのに、ここはもう爽やかな初夏の風がそよぎ、空は青く木々は鮮やかな緑に包まれ、軽やかな足どりのロシア娘の姿が、暗い貨車か

らおろされた私の目に痛かった。どうせ働かされるならシベリアでなくこの方が余程いい、私たちは一ように安堵した。ほろの集団のような私たちは夜になって歩かされ郊外の収容所に入れられた。近くに朝鮮人の広い水田が広がっていた。七月に入り分遣隊が出るという。百二十五人の名が発表され私もその中に含まれていた。鉄道、トラック、船と乗り継ぎ、十日間の旅の末、小さな湖畔の村へ着く。直ちに天幕を張り落ち着く。イシク湖畔の村は、キルギス共和国のアルマタ近くのタムガといい、ソ連軍将校の休暇村であった。昭和二十三年五月までここで働くことになるのだ。作業は石づくりの病院建築であった。本部は隊長田村中尉、事務の村上曹長、通訳の私（大学で一年半ロシア語を習ったのでそうなったのだがさっぱり通じなくて困った。）当番の宮川君（私と同年）、炊事三人、残りは三個小隊という編成になる。

隊長田村中尉は、年輩の召集の方で人柄はおだやかだが、ソ連側にたいしては毅然として一歩もゆずらず、隊員の信頼を一身に集めた。また三人の小隊長もそれ

それ三十代の軍曹で、よく小隊をまとめて、それが二年間のつらい抑留生活の支えとなった。作業は石づくりの建築の仕事であるから、相手は切り石、れんが、砂、セメント等重いものばかり、石材の切り出し、製材、石灰岩を切り出している石灰焼きと重労働も多かった。田村隊長の強引ともいえるソ連側への注文が功を奏して、食糧事情や居住条件等も改善され、何よりも温暖な気候も幸いして、多少の病人は発生したものの、帰国まで一人の犠牲者も出さずに済んだ。定期的に日本新聞が配布され、「ソ同盟共産党小史」などの書籍やパンフレットも読むように言われたが、他地区のようにはゆるる民主化運動や、スタハーノフ運動なども強制されず、比較のおだやかに生活ができた。

四、ナホトカへ

昭和二十三年五月、ついにタムガを離れる日があった。この年は年明け早々建物の完成を急がせられ、夜間作業も含めて「急げ急げ」の毎日であった。民間人であるそれぞれの部署の親方も、しまいには作業の総監督も「日本人はすぐダモイ」だから「急げ急げ」と言い

出し、我々も何かしら帰国の希望を抱き始めた。そしてとうとうその日がきて五月二十日、波止場から再び船上の人となった。集結地が炭坑の町であったのでまたまたまされたかとヒヤヒヤしたが、千人の大隊が編成され貨車に乗せられた。北上した列車がシベリヤ鉄道を東進すると相前後して引き揚げ列車と行き交う。ところが驚いたことにどの貨車もどの貨車も「ソ同盟に感謝しよう」など歯の浮くようなスローガンや赤旗で飾り立てられ、兵隊たちは労働歌やインターを高らかに歌っている。

我々には赤旗一本もなく、全然歌も知らない。とにかくハバロフスクでチェックがあるとのことなのでそこまで何とかしようということになった。大変な大騒ぎとなった。ハバロフスクは無事寝ている中に通過、七月初めナホトカに着いた。海の香りが懐かしくて涙が出た。ナホトカでの一週間はまたまた大騒ぎである。起床から就寝まで気は許せない。歩くときはスクラムを組んで労働歌を歌う。集会がしばしば開かれ共産党の宣伝やアジ演説。何とか第三分所へ送られ、ついに

出所して丘を越えて港まで行軍。日の丸を立てた船が見えたときのうれしさ。船の上で名前を確認されてタラップを登った。白衣の看護婦さんや船員さんの「ご苦労さまでした」の声に迎えられ、涙で目の前が何も見えなくなった。船は朝嵐丸であった。

シベリア抑留

岡山県 田中 一司

帰国後四十余年、シベリアの悪夢も遠い思い出となっている今であるが、三年間の捕虜生活の細かいことは忘れたが、苦しかったことは決して脳裡から消えない。強く心に残っていることを書き述べてみたい。

終戦後十月、ソ連軍警備の中で満州鞍山昭和製鋼所の解体輸送作業は一か月余りで、我が部隊は鞍山の某小学校に集まった。ここで食糧、衣類を各自背中に担いで駅に着いた。

十一月初めの夕方、貨車一両に八十人乗車して出発、

列車は奉天駅に着いた。下車して飯盒炊さんを行った。ところが、約五百人が脱走した。これ以後貨車の戸は絶対開かせない。食糧受領のときだけ警備兵が付き添った。貨車がとまると満人婦女子がたくさんの食べ物を持って集まり、兵隊は貨車に横穴をあけ物々交換をしてにぎわった。ハイルルにおいて日本警察官を捕らえ員数外ができたので警備がゆるんだ。

貨車の中にたくさん板が積まれており、二階をつくって八十人がどうにか足を伸ばして寝られるようになった。缶詰の空き缶を利用して飯を炊き、空腹をしのいだ。便所は貨車の後部の床を切り抜き天幕で囲いをつくった。狭い貨車で楽しみは、将棋、囲碁、歌など思い思いに過ごした。私はロシア語の勉強をしたが、作業など大いに役立った。

貨車の屋根には常時監視兵が歩き回り、小窓から頭を出したりするとすぐ銃殺した。

約二千人を乗せた貨物列車は鞍山を出発し、バイカル湖畔を経由し中央アジアを南下し、タシケントから山脈の斜面をあえぎながら登り十二月中旬アングレー